

私たち

県立伊集院高等学校 二年

榎田彩音

中学校に入学して、一週間。もう、クラス内ではいくつかのグループができている。私はまだ一人だ。どのグループにも入っていない。一人が好きなのはない。友達を作りたい。だが、入学式の次日にはもう仲良しグループができていて、入れなかった。それだけだ。私の他にも、クラスで一人、いつも本を読んでいる子がいる。華宮櫻という女の子だ。腰までの長い黒髪を束ねており、腕も足も細く、白い目はぱっちりとして可愛い顔立ちだ。仲良くなるうと、入学した次の日から、話しかけに行っている。

「おはよう！」

「お、おはよう」

毎日話しに行くと、華宮さんはいつも困った顔で挨拶する。話しかけても会話が続かないので、私が自身のことを一方的に話すだけだ。今日も、彼女に話しかけていると、

「あの……」

と彼女が言ってきた。

「ん？ どうしたの？」

彼女はさらに困った顔になったので、私は何かしてしまっ

たかと不安になった。

「あの……どうして私に話しかけるの？ 私、ほとんど舞川さんと話してないと思うんだけど……」

「なんとなく」

「はい？」

「仲良くなりたいと思ったから」

「……あの、私に話しかけるのやめた方が良いと思う」

「どうして？」

彼女は、少し黙った後、私に顔を近づけ小さな声で話し始めた。

「私、小学校の頃いじめられていたの。その中心だった子が同じクラスに居るから……。私と仲良くしていると、舞川さんもしじめられるかもしれない……」

「へえ。今はされてないの？」

「今も、少しされているかな……」

「は!? やり返さないの？」

「うん……私にはこれが一番楽だから……」

彼女はへらっと笑った。友達になってくれる子が居るわけがないと、諦めているようだった。なんだか私が華宮さんと友達になる可能性が無いと言われていたみたいで、怒々した。

「じゃあ、私と仲良くなる気はないの？」

「……うん。ない、かな」

本当に仲良くなる気はなかったらしい。

「わかった。絶対華宮さんと友達になる」

彼女は驚いた顔をして、自分と友達になるデメリットを話し出したが、私は聞かなかった。はつきり「ない」と言われると、仲良くなりたいたいという気持ちが大きくなる。私は、明日からどうやって仲良くなるかと考えながら帰った。

次の日から私は、朝や休み時間、放課後に華宮さんと話をした。最初は遠慮していた彼女も、私と好きな作家が同じだとわかり、意気投合した。放課後も、彼女と好きな作家の作品について語り合い、盛り上がった。おかげで彼女と名字呼びではなく、櫻ちゃん、美和ちゃんと呼び合う仲に。仲良くなれた証みたいで嬉しい。明日もまた話そう、と約束して帰った。

次の日、学校へ行くと、櫻ちゃんは休み。熱が出たみたいだ。今日は一人かなあ、櫻ちゃん以外に仲の良い子なんていないし。

昼休みも図書館に行つて本を読んで過ごした。最近、ミステリー小説が私のお気に入り。わくわくしながら読み進めていると、後ろから肩をぽんぽんとたたかれた。振り向くと、紫乃椿さんが居た。後ろには、彼女の友達を二人連れている。話がある、と人があまり来ないトイレへ引つ張って行かれた。特に関わりのない子たちだけど、どうしたんだろう。

トイレに着くと、紫乃さんが、

「あのさあ」

と切り出した。

「華宮さんと、この間、話してたでしょ。止めてくれない？」

「は？」

「あの子、鈍くさいし何してもヘラヘラしてて、気味が悪い。舞川さんがあの子と友達やめるなら、私たちのグループに入れてあげてもいいよ？」

「は？ 嫌だけど」

そんなことを私がするわけない。紫乃さんたちは、私が鎮くと思っていたのだろう。固まった後、捨てゼリフを言つて去って行った。かなり怒っていたように見えたけど、明日からいじめられるかもなあ……。少し不安を抱きながら帰宅した。

今朝は、ご飯と味噌汁、そして焼き鮭を食べた。私の一番好きな献立。教室の扉を開けると、女子の話し声が一瞬止んだ。紫乃さんたちだけでなく、他の子たちもこちらを見てヒソヒソ話をしている。もう私と話すと紫乃さんたちに言われたのだろうか。昨日休んでいた櫻ちゃんも学校に来ていて安心した。

その後もずっとヒソヒソ話は続いた。

放課後、一緒に櫻ちゃんと帰ろうとすると、櫻ちゃんはきよるきよると何かを探しているみたいだ。聞けば丸いふわふわとしたウサギのキーホルダーが無いらしい。四限目の体育まではあったのに、と泣きそうな顔をしている。ひいおばあちゃんが亡くなる前に誕生日プレゼントでくれた物で、凄く大切な物みたい。私も一緒に学校中を探し回った。

結局、櫻ちゃんのキーホルダーは、体育館にあるトイレの

ごみ箱に捨ててあった。そこには、私の財布もあった。中に入っていたお金が盗まれていなかったことには、ほっとした。櫻ちゃんの方を見ると、目に涙を浮かべて、良かった……とキーホルダーをなでていた。二人で、見つかって良かったねと言い、帰宅した。先生には明日相談しよう。

絶対に犯人を暴いてみせる。そう思って学校へ行くと、私は先生に呼び出された。何かと思っていると、昨日のことだった。櫻ちゃんと私の物をごみ箱に捨てていた人が居たと教えてくれた生徒がいたそう。犯人の名前を聞いた私と櫻ちゃんは、先生に相手との和解を勧められた。だが、櫻ちゃんは絶対に嫌だと言った。自分の大切なキーホルダーを捨てた人とは話もしたくないそうだ。

結局、私たちは犯人と和解しなかった。

教室へ戻ると誰もいなかった。一限目は体育だと気付き、私たちは更衣室まで走った。急いで着替えると何とか間に合ったが、疲れた……。息を整えながら準備運動をする。今日は、バレーの試合をするようだ。男女二グループに分かれて女子同士、男子同士で対戦する。私と櫻ちゃんは同じグループで、私がライト、櫻ちゃんはセッターの位置へ。他の子は、皆後ろへ行きたがりなかなか決まらなかったから、私が無理矢理決めた。

試合は散々だった。ボールはあちこちに飛んでいくし、サーブは入らないし。本当にひどかったけど、良い事もあった。櫻ちゃんが上げたトスを打つと、ボールは私たちの物を盗ん

だ犯人の所へ飛んでいき、アタックが決まった。

体育が終わり、更衣室へ向かう途中、二人で、「あの子の所に行ったスパイク、良かったね」

と言った。私はすっきりした。上辺だけの謝罪をされるよりもずっと価値がある気がした。私たちの物を捨てた犯人と和解しなくて良かったと思った。もっともっと櫻ちゃんと仲良くなりたい。

「櫻ちゃん」

と私は声をかけた。

「今度一緒に遊びに行こうよ」

櫻ちゃんは満面の笑みでうなずいた。

「もちろん！」

私たちはこれからもっと仲良くなれる気がする。櫻ちゃん
の笑顔に癒やされながら、私は思った。

「櫻ちゃん可愛すぎるでしょ」